

# 漢字万葉仮名交じり表記に見える音仮名と訓仮名の区別意識について

澤崎 文

【キーワード】 万葉集 新撰万葉集 表記意識 表記環境 音訓交用

## はじめに

いわゆる万葉仮名<sup>①</sup>は、中国語の文字である漢字の字音を利用して日本語の表記に当てた音仮名と、漢字の日本語よみである字訓を利用して日本語の表記に当てた訓仮名との二種類に大きく分けられる。『万葉集』の表記において、訓仮名は使用される表記体が音仮名と異なることが報告されている。つまり、一字一音の万葉仮名で全体を表記する仮名主体表記には専ら音仮名が使用され、正訓字を主体として万葉仮名も交える訓字主体表記には音仮名と訓仮名がともに使用される。

訓字主体表記は、漢字万葉仮名交じり表記であるが、その内部には正訓字と万葉仮名といった二種の用法の漢字が交え用いられており、さらに万葉仮名には音仮名と訓仮名とが交え用いられていることになる。この表記体の内部において、音仮名と訓仮名は用いられ方がどのように違っているのか、特に万葉仮名が書かれる箇所の直前にどのような文字が置かれるかという仮名の表記環境に注目してその違いと両者の性格を述べる。そ

のことから、漢字万葉仮名交じり表記に見える音仮名と訓仮名の区別意識を明らかにすることが本稿の目的である。

また、平安時代に平仮名が成立した後にも、漢字万葉仮名交じりで歌を表記した資料がある。本稿では、『新撰万葉集』の表記を例に、ここにも『万葉集』の訓字主体表記と同様の表記意識が働いているかどうかを、特に音仮名と訓仮名の区別意識という点から調査し考察する。

## 一 音仮名と訓仮名の使用環境

音仮名と訓仮名は、その発生の起源から異なり、使用される環境も異なる場であったことがすでに言われている。

橋本四郎（一九五九）は、『万葉集』に見られる訓仮名を精査し、訓仮名が正訓字と同じ環境で用いられることを明らかにした。『万葉集』の歌本文は、おおまかには巻ごとに異なる表記体で書かれている。全体を一字一音の万葉仮名であらわす仮名主体表記と、正訓字を主体とし、主に付属語部分や活用語の

語尾などを万葉仮名であらわす訓字主体表記である。

【仮名主体表記】②

例 安思比奇能<sup>あみひき</sup> 夜麻毛知可吉乎<sup>やまもろちかき</sup> 保登等藝須<sup>ほととぎす</sup>  
都奇多都麻泥尔<sup>とくたともだ</sup> 奈仁加吉奈可奴<sup>なにかきかな</sup>

(卷十七・三九八三)

【訓字主体表記】

例 昔見之<sup>むかしみし</sup> 象乃小河乎<sup>ささのをかは</sup> 今見者<sup>いまみれば</sup> 弥清<sup>いよよきやく</sup> 成尔来鴨<sup>なりけるかも</sup>

(卷三・三二六)

橋本は、訓仮名が正訓字の多用される訓字主体表記に専ら使用され、仮名主体表記ではごく少数であることを述べた。また、訓仮名字母として使用される漢字は同時に正訓字としても使用されることを指摘し、訓仮名が正訓字との両用を辞さず正訓字と連続性の見られるところにその発生の起源を見たのである。このような訓仮名の発生は、大飼隆（一九九四）が具体例で示すものと同様のことを意味するであろう。大飼は大宝二年美濃戸籍の人名表記に見える音訓交用について次のように述べる。

「屋加須賣」「屋奈比賣」は、それぞれ「住居」「家並」の意義と考えた。「やかす」の語原はヤケの交替形ヤカに「栖」が付いたものと推定されているが、この字面はヤに「屋」カに「加」をあて、「屋」が訓仮名に接近している。（「中略」）このような例を中間に置いて、正訓字と訓仮名は連続するものである。（「中略」）訓仮名の使用環境は、音仮名・正訓字交用の文字連鎖である。そして、訓仮名の起源は、正訓字であつたものが、接頭辞や語源解釈

的な表記を出入口として、表音の側に入ったところにあつたと考えることができそうである。

つまり、訓仮名は発生の段階において正訓字と不分明であり、正訓字を使用する表記体にしか存在しえなかったということである。正訓字との親しさはここに説明される。

さらに大飼は、次のように述べる。一つの表記体の中に正訓字と音仮名が交え用いられる場合に、同じ漢字字体が表語・表音のいずれにも解されて読み難く、それを克服するため次第に音仮名だけで連鎖をなすようになり、その結果訓仮名が使用されるべき環境は失われた。ただし清濁の書き分けがゆるい美濃国戸籍や、平城宮本簡、正倉院万葉仮名文書・甲などに音訓仮名の交用が見られることについて、「時代の流れの底辺的な部分、すなわち襲の場合は、八世紀を通じて訓仮名が使い続けられていた」と言うように、書き手の態度によつて訓仮名と音仮名が排除し合うか、交用されるかが決まったとするのである。大飼（一九九四）に従うと、八世紀における訓仮名の使用環境は次のようにまとめられる。

【晴 公的な表記】：音仮名と排除し合う

例 九州戸籍（筑前・筑紫）など

【襲、私的な表記】：音仮名と交用する

例 美濃戸籍、本簡、正倉院仮名文書  
・甲など

それぞれ例として示した具体的な資料は、大飼の記述を元に解釈しまとめたものであるが、『万葉集』の訓字主体表記をこ

のどちらに分類すればよいかは明らかでない。『万葉集』が襲の性質をもつ資料だとは思えない一方で、訓字主体表記の中に正訓字・訓仮名・音仮名が交用されていることは確かである。漢字万葉仮名交じり表記である訓字主体表記は、正訓字が多用される点で訓仮名の使用環境となるのが当然であるのかもしれないが、それでは晴の表記で音仮名と排除し合う訓仮名の性格にとっては例外的なこととなってしまう。

稲岡耕二(一九六五)は、『万葉集』で音仮名間に孤立する訓仮名字母について、仮名として訓専用のものか、もしくは音仮名と訓仮名として両用されるうち訓仮名頻度の高いものに限る、強いて訓頻度の低い両用仮名を使用することはないと述べる。個々の訓仮名の表記環境に対し、音仮名と区別する明らかな表記意識を示すとともに、通常の訓仮名が正訓字や訓仮名と接して用いられることを前提とする記述である。訓字主体表記の訓仮名全般が正訓字や訓仮名と接した表記環境に用いられるのか、少なくとも音仮名と比較して検証する必要がある。訓字主体表記の内部において、訓仮名の使用される箇所に音仮名とは異なる傾向があるのではないかと考えられるのである。

## 二 『万葉集』訓字主体表記における音訓の区別

『万葉集』の訓字主体表記において、ある仮名が書かれる箇所の直前がどのような用法の文字であるかという、仮名の直前の表記環境について調査し、表にまとめたものが(表1)である。

仮名の種類を音仮名(二合仮名を除く。これについては後述)、  
・訓仮名・二合仮名<sup>③</sup>の三種に分け、直前の文字用法の種類は正訓字・訓仮名・音仮名<sup>④</sup>・なし<sup>⑤</sup>・不明<sup>⑥</sup>の五種に分けて示している。具体的に例を挙げると、  
「潮毛可奈比沼(潮もかなひぬ)」において、仮名の種類は「毛」「可」「奈」「比」が音仮名、「沼」が訓仮名に分類される。この表記において、「毛」の直前の文字が正訓字「潮」であるため、「毛」の直前の文字用法は正訓字に分類され、「可」「奈」「比」「沼」はそれぞれ直前の文字が音仮名「毛」「可」「奈」「比」であるため、直前の文字用法は音仮名に分類される。

〈表1〉を見ると、音仮名は直前の文字が訓用法(正訓字+訓仮名)である場合に64%、音仮名である場合に31%使用されるのに対し、訓仮名は直前の文字が訓用法である場合に86%、音仮名である場合に11%使用される結果となる。つまり訓仮名の表記環境を見たとき、直前が音仮名である割合に対し直前が正訓字や訓仮名である割合が、音仮名の表記環境よりも高くなっているということである。<sup>⑦</sup>

このことは、橋本が述べた、正訓字と同

【表1】『万葉集』訓字主体表記における音仮名・訓仮名の直前の表記環境

仮名		直前の文字用法					
		正訓字	訓仮名	音仮名	不明	計	
音仮名 (除二合仮名)	用例数	8695	532	4480	78	643	14428
	割合(%)	60	4	31	1	4	100
訓仮名	用例数	3056	964	511	84	69	4684
	割合(%)	65	21	11	2	1	100
二合仮名	用例数	126	10	34	3	1	174
	割合(%)	72	6	20	2	1	100

じ環境で用いられるという訓仮名の傾向が、訓字主体表記の内部においても、正訓字もしくは訓仮名の後に続いて用いられるという形で示されたものと言える。少なくとも、音仮名の表記環境に比して訓仮名の表記環境の方に、よりその傾向が見られるのである。

また、稲岡が前提としていられると思われる、通常の訓仮名は正訓字や訓仮名と接して用いられるという点に關しても、具体的な数値で証明できたとと言えるであろう。稲岡が『万葉集』の訓仮名の例外的用法と考える音仮名間に孤立した訓仮名は、調査したところ訓字主体表記中に九四例<sup>8)</sup>しか見当たらず、それは訓字主体表記における訓仮名全体の2%にすぎない。一方で音仮名間に表記される音仮名(「合仮名を除く」)は一八四七例と、訓字主体表記における音仮名全体の約13%に及ぶ。

〈表1〉は、すべての音節をひとしなみに扱い、また個々の音節や字母の事情を取り払って、大まかに傾向を述べたものである。具体的な用例を個々に採り上げてなぜこの環境にこの仮名を用いたのかという理由を求めれば、様々なことが考えられる。例えば、音節によっては訓仮名を用意できない場合もある。うし、また字母がもつ漢字字義を生かし、技巧的な表記を目指すためにわざと特定の字母を特定の箇所を使用した場合もある。しかし、音仮名と訓仮名の表記環境を全体として捉えた傾向として、前述のように言えることは確かなのではないか。

稲岡(一九六四)は、『等』が『万葉集』中にト乙類をあらわす音仮名としてもラをあらわす訓仮名としても多用されるこ

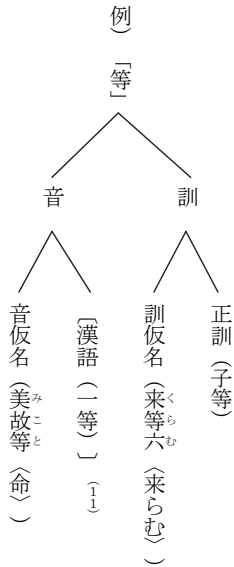
とについて、訓仮名「等」は前後が訓字で埋められた部分に使用され、訓字の集団内に訓字に接して用いることによって、『等』字も訓読すべきものであることが暗示されていると述べた。同じ文字でもそれを書く表記環境によって訓よみすべきか音よみすべきかを判断させるといふことの実例である。このことと〈表1〉の結果とを考え合わせると、特に「等」のような音訓両用の文字でなくとも、直前が訓用法の文字であるという表記環境に訓仮名を置くことは、訓よみすべき文字として判断されるために有効だったのではないか。稲岡が「等」において具体的に示したような表記意識が、どのような仮名を書く際にもある程度あったために、〈表1〉に見た訓仮名と音仮名における表記環境の違いが生じたのではないかと思われる。<sup>9)</sup>

訓仮名は音仮名の直後を選んでいるが、同じ仮名でも訓仮名の直後を避けようという意識はそれほど見られない。むしろ積極的に訓仮名の直後という表記環境を選んでいるかに見える。仮名の表記環境として問題となるのは、直前が正訓字であるか仮名であるかではなく、訓用法であるか音用法であるかなのである<sup>10)</sup>。歌の表記のように言葉の形を明らかにする必要がある場合、漢字万葉仮名交じり表記において、漢字を見た際にどのようによむかという選択肢は、大きく「訓」か「音」かの二通りが思いつくはずである。訓でよむ際はよんだ後に用法が正訓か訓仮名かを確かめるという順になる。音でよむ際にも、『万葉集』においては少ないが、漢語か音仮名かを確かめることがあり得る。少なくとも『万葉集』の訓字主体表記において、用

法として漢字であるか仮名であるかに関わらず、文字としての漢字を音でよむか訓でよむかははっきりと区別して意識されており、どちらを選択するかが一つ一つの文字に対して求められ、判断の材料として表記環境があった。訓仮名の成立が正訓字との連続性の上にあることや成立後も訓仮名が正訓字と共存しやすいという点も、この表記意識のためと思えば理解される。

【『万葉集』訓字主体表記において漢字をよむ過程】

漢字 ↓ よみ ↓ 用法(例)



また、〈表1〉に仮名の種類として音仮名と区別して示した二合仮名について言及しておく。二合仮名は、漢字音を日本語の表記に利用している点<sup>①②</sup>で音仮名の一種と見なされるが、漢字音が末尾にもつ韻尾に母音を添えて開音節化し、一字で二音節をあらわす仮名として使用される点で、元の中国漢字音とは離れた音を示す文字用法と言える。毛利正守(二〇一〇)は、人麻呂歌集のいわゆる略体歌(毛利は「詩体歌」と呼ぶ)において、主に正訓字と訓仮名が用いられ音仮名は基本的に用いられないにも関わらず、二合仮名が使用されていることや、仮名

主体表記に二合仮名がほとんど用いられず、もっぱら訓字主体表記に用いられていることなどから、二合仮名は出自が音仮名でありながら「訓用法」として扱われていることを指摘した。

〈表1〉において二合仮名の表記環境をみると、直前が訓用法である環境に78%、直前が音仮名である環境に20%使用されており、先に見た音仮名と訓仮名の中間的な性格を示している。音よみか訓よみかという判断の上で、二合仮名は完全な訓よみ扱いになりきっていないものの、日本における漢字音であって中国での漢字音とは離れているという認識の元に、訓よみに近い意識で捉えられるようになっていたのではないだろうか。

### 三 訓仮名と音仮名の性格

前節において『万葉集』訓字主体表記の訓仮名は、正訓字や訓仮名といった訓用法の文字が直前にある環境へ積極的に使われやすいと考えた。一方の音仮名は訓仮名と比べて、直前の文字が音仮名である環境に使用される割合が高い。このことは、言い換えれば訓仮名は訓用法に親和的な文字であり、音仮名は訓用法から独立的で音仮名どうしでまとって使用される性格をもつということである。またこの両者の性格は、必然的に音仮名と訓仮名が排除し合う結果にもつながる。これは第一節でふれた大飼(一九九四)において、八世紀の晴で公的な表記における訓仮名の使用環境が、音仮名と排除し合うとしたことと矛盾しないと思われる。一見、正訓字と音仮名と訓仮名とが交

用されている訓字主体表記であるが、その内部においては音訓が明らかな区別意識をもつて使用されており、排除し合おうとしているのである。

ただし、音仮名も、訓仮名と比べればその割合が低いというだけで、やはり直前に訓用法の文字がある環境へ64%も用いられている。訓字主体表記はその名の通り正訓字を主体とする表記体であり、そこに書かれる仮名の表記環境としてそもそも直前が正訓字である場合が圧倒的に多い。音節によっては適当な訓仮名を用意できない場合もあり、直前が訓用法の文字である表記環境すべてに訓仮名を使用することは困難である。また、すべての文字が正訓字の直後にあれば訓よみされると考えるのは極端であり、万葉仮名として訓仮名よりもずっと使用頻度の高い音仮名は、繰り返し使用されることによって、ある音をあらわす仮名として認識されることを容易にしていたであろう。

さらに、澤崎(二〇一二)、(二〇一三)で、『万葉集』の訓字主体表記に使用される音仮名は、その内部に二種類のものがあり、正訓字の直後であっても音仮名であると認識されやすい字母と、そうでない字母とが使い分けられていたことを述べた。すなわち、サ・シ・ム・ヤの四音節をあらわすのに頻用される仮名のうち、「佐・思・武・夜」は正訓字の直後に使用されにくく、「左・之・牟・也」は正訓字の直後であっても問題なく多用されるという結果を受け、仮名の連鎖の中に使用されることにしか向かない字母と、正訓字と交用することも可能な字母の二種類があると指摘した。言い換えれば、前者は正訓字

に対して独立的な字母であり、後者は正訓字に対して親和的な字母である。正訓字に対して親和的な字母は、字形が簡略で漢字に実質的な字義が乏しいという特徴があり、このことによって、正訓字の直後に置かれたとしてもすぐにある音でよむ音仮名であると認識されやすい。正訓字の直後に音仮名が置かれる状態であってもよむために問題とならないのである。

本来、訓用法に対して排除し合う性格をもつ音仮名が、その内部にも正訓字に対して独立的な字母と親和的な字母という違いをもっている。また、正訓字に対して独立的な音仮名字母は、正訓字の直後に使用されることを極力避けるが、正訓字に対して親和的な音仮名字母は、音仮名の連鎖の中にも多く使用され、正訓字の直後であることにこだわらない。これを見てもやはり、音仮名全般がもつ本来的な性格は訓用法に対して独立的で訓用法と排除し合うものであり、音仮名だけの連鎖で語を表記しようとするものようである。一方、訓用法に対して親和的な性格をもつ訓仮名は、専ら『万葉集』の訓字主体表記にあらわれ、仮名主体表記にはごく少数しか用例がない。『万葉集』という晴の表記には訓仮名の性格の例外となるものがほとんどないが大飼の指摘したとおり、襲の表記や私的な表記である木簡の類には、訓仮名が音仮名と交用される様子が見てとれる。

【観音寺遺跡出土木簡<sup>13</sup>】(七世紀末) 木簡番号六九  
奈尔波ツ尔作久矢己乃波奈

【藤原宮跡出土木簡(八世紀初頭) 木簡番号一六一三】  
奈尔皮ツ尔佐久己乃皮奈布由己母利伊真皮々留部止



傍線を付した字が訓仮名であるが、こういった音仮名に交用される訓仮名は、音訓の区別なしにただ「矢」ならば「ヤ」の音をあらわす文字として認識されているのであろう。訓字主体表記中の正訓字に親和的な音仮名も同様に、「左」ならば「サ」の音をあらわす文字として認識されているのではない。資料や状況は違うが、訓仮名も音仮名もその本来の性格を逸脱した使用をなされる文字は、純粹にある音をあらわす文字としての機能を獲得しており、そこに音でよむか訓でよむかという判断はほとんど介在していないのである。橋本（一九五九）は、『万葉集』に音仮名と交用される訓仮名を指して、「既に起源的な性格を止揚して、仮名一般といふべき性格を獲得しつつあったと考へられる。」と述べている。

#### 四 『新撰万葉集』における音訓の区別

『万葉集』の訓字主体表記において、原則的にそこにある文字を訓でよむか音でよむかという判断がなされているであろうことを、前節まで述べてきた。このような判断は一字一音仮名書きである仮名主体表記にはほとんど存在しないであろう。訓字主体表記は漢字万葉仮名交じり表記であり、正訓字と訓仮名と音仮名が交え用いられているからこそ訓と音とがよみとして想定され、判断の必要が生じる。本節では、このような表記意識が、『万葉集』より時代が降った平安時代の漢字万葉仮名交じり表記においても見られるか否かを検証する。

漢字万葉仮名交じり表記を検討する前に、平安時代における一字一音の仮名書き資料について確認しておきたい。なにより上代と異なるのは、九世紀の後半にはすでに文字としての仮名である平仮名があったとされる点である。平仮名の字母には音仮名起源のものと同訓仮名起源のものとの区別がなく、両者は交用されている。その様子は上代における木簡や正倉院仮名文書など、大飼によって襲の資料とされたものが示す様子と似通う。また、九世紀末～一〇世紀前半の表記を反映した資料<sup>①</sup>とされる『日本紀竟宴和歌』は、ほぼ一字一音の万葉仮名で書かれているが、ここにも訓仮名が音仮名と交用されており、両者の区別はないように見受けられる。

【『日本紀竟宴和歌』<sup>①</sup>の訓仮名「津」…傍線部】

与古加波能<sup>よこかはの</sup>安多利爾多知之<sup>あたりのりたかちの</sup>久毛乎美豆<sup>くまひみまめ</sup>  
阿麻乃比津支波<sup>あまのひつしま</sup> 衣弓之支美奈利<sup>えゆみのしまなり</sup>

(三二)

これについて、浅見徹（一九六五）は次のように述べる。

ひらかなが用ゐられるやうな時代、つまり日本語を日本語として表記できる時代に既に入つての竟宴和歌に、書紀にならひつとも訓仮名が混入するのは、真仮名の漢文体系中の文字といふ原則が忘れ去られてきた、その時代を考へることができよう。つまり、音仮名・訓仮名の別の意識が、消え去らないまでも、曖昧になつてきてゐるのではないか『日本紀竟宴和歌』は、書名どおり『日本書紀』の歌謡表記に影響を受けたと考えられる字母が目立ち<sup>②</sup>、その万葉仮名が襲の資料の私的な表記であるとは考えられない。当時にお

て、一字一音の仮名表記をする場合には、万葉仮名であれ平仮名であれ、晴の表記であれ麿の表記であれ、音訓の区別に対する意識があり、もしくは全くなされていないと考えられる。

一方で、同じく九世紀末～一〇世紀初めの表記を反映した資料とされる『新撰万葉集』は、『万葉集』の訓字主体表記と同じく漢字万葉仮名交じり表記で書かれている。訓仮名は『万葉集』の訓字主体表記以上に多く用いられる。

【『新撰万葉集』(一)の訓仮名…傍線部】  
 水之上丹 文織素 春之雨哉 山之縁緒 那倍手染濫

(上二)

前掲橋本(一九五九)は、『新撰万葉集』の表記に対し、「訓仮名・音仮名の別に対する意識は殆どなく、ある音節に対しては訓を利用し、或音節に対しては音を利用してゐる。」とし、「万葉の訓仮名とは非連続であり、草仮名の支へによつて音が訓かを顧慮する意識がなかった」ものと述べた。しかし、漢字万葉仮名交じり表記で書かれている以上、そこにある文字を正訓字・訓仮名・音仮名のいずれとしてよむかを判断しなければならぬ事情は『万葉集』の訓字主体表記と同じであり、音が訓かを顧慮する意識は『新撰万葉集』にもあると考えた方が自然ではないだろうか。

『新撰万葉集』は、上下二巻に分かれ、上巻序に寛平五年(八九三)九月二十五日、下巻序に延喜十三年(九一三)八月二十一日の日付がある。日本語資料としては、上代特殊仮名遣の甲乙の区別がないこと、ア・ヤ行のエを区別していることから、

成立した九世紀末～十世紀初め頃の表記と考えてよいかとされている。また、浅見徹(一九六四)、乾善彦(一九八三)、内田順子(二〇〇五)等の先行研究によれば、『新撰万葉集』は

助詞の表記をほとんど省略せず、一つの音節をあらわす仮名に原則一字母のみを用い、一つの漢字に対するよみをできるだけ一つに固定しようとするなど、仮名だけではなく表記全体に対してかなり自覚的であり、歌のよみを正確にあらわし、よみ誤ることのないよう配慮されている。この一音節に対して原則一字母をあてる配慮によつてか、『新撰万葉集』の音仮名字母には、特に表記環境によつて異なる字母を使おうとする傾向はみられない。この点、『万葉集』の訓字主体表記とは違っている。

そこで、音仮名と訓仮名の直前の表記環境を見てみると、〈表2〉のとおりである。音仮名は直前が訓用法である環境に64%、直前が音仮名である環境に33%使用され、訓仮名は直前が訓用法である環境に89%、直前が音仮名である環境に9%使用される。この数値は、第二節において『万葉集』の訓字主体表記で見た音仮名と訓仮名の割合にほぼ等しく、両者を比較すればやはり

【表2】『新撰万葉集』における音仮名・訓仮名の直前の表記環境

仮名		直前の文字用法				
		正訓字	訓仮名	音仮名	なし	不明
音仮名 (除二合仮名)	用例数	372	117	250	4	18
	割合(%)	49	15	33	1	2
訓仮名	用例数	837	99	92	3	20
	割合(%)	80	9	9	0	2
二合仮名	用例数	48	16	7	1	0
	割合(%)	67	22	10	1	0



音仮名は訓用法に対して独立的な性格、訓仮名は訓用法に対して親和的な性格をもつと言える。

さらに、「二合仮名について言えば直前が訓用法である環境に89%、直前が音仮名である環境に10%と、訓仮名の表記環境とほとんど同じ割合を示している。『万葉集』の訓字主体表記において音仮名と訓仮名の中間的性格をもつと見られた二合仮名は、『新撰万葉集』にあつてより訓仮名の性格へと近づいているように考えられる。

表記環境に関する以上の結果から、『新撰万葉集』にも、『万葉集』の訓字主体表記と同程度に文字に対する音訓の区別がなされており、そこにある文字を音でよむべきか訓でよむべきかという判断を容易にするために、表記環境に配慮した用字がなされていると結論づけたい。平仮名成立後の万葉仮名であつても、漢字万葉仮名交じり表記という表記体が、文字のよみに対する音訓の判断を要求するのではないだろうか。

先行研究のとおり、『新撰万葉集』においては一つの音節になるべく一字母を当てようとする傾向があり、『万葉集』におけると同様、個々の例を見ていけば、単に助詞の表記など正訓字の直後に置かれやすい音節をあらわす文字として訓仮名が選ばれたことによる偶然ということもあろう。また、表記者が意識的に訓用法の後に訓仮名を置くよう考えたのか、それとも無意識のうちに訓用法の後には同じ訓でよむ仮名を置いてしまったのかという表記意識は、厳密に判断することが難しい。

しかし、表記者による表記環境への意識的な配慮が確かにあ

つたと思われる例として、次のようなものを参考に挙げたい。

『新撰万葉集』には、音節「リ」を一字一音であらわす仮名として、「里」が二九例、「利」が一例使用されている。いま用例の少ない「利」は置き、音仮名「里」をみると、正訓字の直後である環境に三例、音仮名の直後である環境に二六例使用される。さらに、「里」の字は音仮名としての二九例のほか、正訓字「さと」<sup>18</sup>として六例、「三里」で「つく」とよませる例が一例存在する。「里」を正訓字「さと」として使用する場合、その直前の文字用法は六例とも正訓字である。

山里者<sup>やまのりもの</sup>（一九、一七九）誰里丹<sup>たれりたん</sup>（八二）山里之<sup>やまのりの</sup>（一八五）古里砥<sup>ふるき</sup>（三〇三）山辺之里丹<sup>やまのべのりたん</sup>（四二〇）

また、「さと」という語は「ふるさと」「やまさと」を含め全部で八例あるが、そのうち七例までが正訓字の後に書かれており、直前が音仮名である唯一の例は、正訓字「郷」で書かれる。

駐牟留郷之<sup>とどむるさとの</sup>（六五）

これは、音仮名の直後に「里」の字を置く<sup>19</sup>と音仮名リと間違えてよまれてしまったため、表記者が意識的に「郷」の字を使用したものと考えられ、『新撰万葉集』の表記者が文字を書く際に表記環境に配慮した表記意識をもっていたことを示す一例である<sup>20</sup>。稲岡（一九六四）が『万葉集』における仮名「等」の用法で指摘したものと、非常に似た意識であると言える。

このような例や、『新撰万葉集』の表記者の態度が表記全体に自覚的であるという先行研究の指摘からみて、『新撰万葉集』の漢字万葉仮名交じり表記においても、表記環境に配慮した表

記意識がなされていると考えたい。そして、そのような表記意識の結果、音仮名と訓仮名に対しては明らかな区別意識が存在すると思われるのである。

## おわりに

漢字万葉仮名交じり表記は、一見漢字ばかりが並んでいるが、その内実は正訓字と訓仮名と音仮名という異なる用法の文字が存在しており、読者はそのつど文字を判断していく必要があった。判断する際にまず考えられたのは漢字を音でよむか訓でよむかであり、言葉の形を捉えた上で、文字の用法が漢字であるか仮名であるかが考えられたであろう。そして、音訓の判断を容易にするため、訓仮名は直前の文字が訓用法である環境に、音仮名は直前の文字が音仮名である環境に使用するという、仮名の表記環境を意識した用字がなされた。

このことから、漢字万葉仮名交じり表記の表記者が、音仮名と訓仮名を全く別のものとして区別していたことがうかがえる。ただし、訓仮名も音仮名もその本来の性格を逸脱して使用される文字は、純粹にある音をあらわす文字としての機能を獲得しており、そのような仮名はすでに音訓の区別意識が薄れていると考えられる。

また、平仮名成立後の万葉仮名は、平仮名がそうであるように、晴の場における表記であっても音仮名と訓仮名の区別意識が失われることがある。しかし、『新撰万葉集』については必

ずしも音訓の区別が失われているとは言えず、それは漢字万葉仮名交じり表記という、文字としての漢字を正訓字・訓仮名・音仮名の用法として様々に用いることが原因である。

## 《注》

(1) 本稿では、『万葉集』以外の資料に使われるものであっても、字形を漢字としながら仮名の用法がなされる文字を、通称に従って「万葉仮名」と呼ぶことにする。

(2) 本稿における『万葉集』の本文・訓・歌番号は、塙書房刊『萬葉集 本文篇』による。また、本稿では訓字主体表記巻および訓字主体表記巻を巻一〇四、六〇十三、十六の十三巻およびその表記と定義し、仮名主体表記巻および仮名主体表記巻を巻五、十四〇十五、十七〇の七巻およびその表記と定義する。本稿で訓字主体表記巻に巻十九を含めない理由は、この巻に訓仮名使用例が十七例と極端に少なく、訓仮名使用の観点から見た性格としては仮名主体表記巻に近いものと思われるからである。

(3) 二合仮名とは、中国漢字音で m・n・ng・p・t・k の子音を韻尾にもつ字を、日本で仮名として使用する際に末尾に母音を添えて、一字二音節をあらわすようにしたものである。例えば、散(ng 韻尾)、雑(p 韻尾)、乞(t 韻尾)などがそれに当たる。

(4) 直前の文字用法としての分類は、表の煩雑化を避けるためあまりあえず二合仮名を音仮名の中に含めて分類する。

(5) 「なし」とは、当該の仮名が歌頭に書かれる場合、直前に文字がないためにこのように分類するものである。当該の仮名が句頭に書かれる場合は、歌頭でない限り歌中と考え、「なし」に分類しない。

(6) 「不明」には、当該の仮名の直前の文字に対するよみが明らかでないものの他、直前の文字が「香」「辺」などのように音仮名か訓仮名か明らかでないものや、直前の文字が地名等の固有名詞を表したものである場合などが分類される。直前の文字が固有名詞をあらわす音仮名である場合も「不明」に分類する理由は、固有名詞は特定の漢字により固定的な表記がなされることで表語性を得ているという性質があり、純粹な仮名と考えるには躊躇されるためである。例えば、『万葉集』の非固有名詞表記において時代が降ると二合仮名の使用が衰退していくのに対し、固有名詞表記は継承性をもって二合仮名が使われ続けること、尾山慎(二〇〇七)に詳しい。また、「孤悲」「恋」や「為便(術)」など、固有名詞以外でも仮名表記が表意性を持ち、固定化しつづけている語が存在するが、固定化の完了を認めるか否かの線引きが困難であるため、いま考慮しないこととする。

(7) 本稿が依っている増補房刊『万葉集 本文篇』は、西本願寺本を底本としている。底本によつて仮名が書かれる表記環境に差がある可能性もあるが、本稿ではそれを考慮していない。諸本間の表記のゆれによる傾向の違いについては機会を改めて調査したい。

(8) 稲岡(一九六五)では七七例としている。訓を別本により定めていることや、例外の認定が本稿とは異なるためと思われる。

(9) 表記環境による文字使用の傾向が、表記者が読者を想定したことによる意識的なものであるのか、無意識による自然な現象であるのかについては、一考される必要がある。意識・無意識について、一方の可能性を完全に排除して他方を証明することはかなり困難であるが、「等」の例のように、一つの漢字が幾通りにもよめる事実があった上で表記環境によって使用傾向が異なる場合は、そこに表記者の意

識的な配慮があると見て良いのではないだろうか。

(10) この点、以前発表した澤崎(二〇一一)および(二〇一三)において、字母選択に関わる表記環境は直前が正訓字であるか仮名であるかであると考えていた。以前の段階では音仮名のみを対象としたためその結論に至っていたが、訓仮名も考察対象に加えれば、漢字万葉仮名交じり表記における万葉仮名の表記環境は、訓用法の文字であるか音用法の文字であるかが字母選択に関わると見ることができ。音用法には音仮名以外に漢語が考えられるが、『万葉集』の中に漢語はごく少なく、実質的に考慮すべきほど用例が得られない。

(11) 『万葉集』の歌中に「等」を漢語表記に使用する例がないため、いま「」に入れて表示し、例を創作して載せた。漢語以外は実際に『万葉集』中に見られる表記例である。

(12) 注3を参照。

(13) 木簡の翻刻は奈良文化財研究所木簡データベース

(<http://www.nabunken.go.jp/Open/nokan/nokan.html>) による。

(14) 西宮一民(一九六八)による。

(15) 本稿における『日本紀寛宴和歌』の本文・訓・歌番号は梅村玲美(二〇一〇)による。

(16) 梅村(二〇一〇)に、『日本紀寛宴和歌』は歌作者の書紀に対する知識と用字とに関連があることが詳述されている。

(17) 本稿における『新撰万葉集』の本文・訓・歌番号は、寛永七年版本(増田繁夫監修・杜鳳剛編『新撰万葉集総索引』に所収の影印)によつた。訓について、明らかな間違いは直し、底本に付訓のない部分は付訓部分を参考にして補った。清濁は区別していない。

(18) 正訓字の用例は、注17前掲の索引によつた。

(19) 内田(二〇〇五)には、六五番歌の「サト」を「郷」と表記することについて、この歌に使用される「浮石」の語が律令用語であることから、当時の郷里制によって「里」ではなく「郷」が使用されたとする。しかし、『新撰万葉集』中に「サト」をあらわす「郷」は五四四番歌にもあり、こちらは原撰本系統には存在しない下巻の「女郎花歌」に当たするため内田の考察の対象とはされていない。

《引用文献》

浅見 徹(一九六五)「借訓假名の多様性―新撰万葉集の場合―」『萬葉』五七号

(一九六四)「新撰万葉集の用字―基礎作業として、助詞の表記について―」『萬葉』五一号

稲岡耕二(一九六四)「音訓両用の仮名について」『萬葉』五一号初出

『萬葉表記論』(塙書房 一九七〇) 所収

(一九六五)「万葉集の交用表記・準交用表記について」『武庫川女子大学紀要』二二集初出

『萬葉表記論』(塙書房 一九七〇) 所収

乾 善彦(一九八三)「新撰万葉集の和歌表記とその用字の一特徴―表記史の一視点から―」『文学史研究』二四号初出

「漢字による日本語書記の史的研究」(塙書房 二〇〇九) 補訂所収

大飼 隆(一九九四)「訓仮名の使用環境―大宝・養老戸籍の人名にみる―」『国語文字史の研究』二(和泉書院) 初出

『上代文字言語の研究 増補版』(笠間書院 二〇〇五) 所収

内田順子(二〇〇五)「『新撰万葉集』和歌の表記について」『新撰

万葉集注釈』卷上(一)(和泉書院)

梅村玲美(二〇一〇)『日本紀寛宴和歌の研究―日本語史の資料として―』(風間書房)

尾山 慎(二〇〇七)「万葉集における子音韻尾字音仮名について」『萬葉』一九八号

澤崎 文(二〇一二)「『万葉集』の訓字主体表記に見える二種の仮名―表記環境による字母の違い―」『国文学研究』一六八集

(二〇一三)「万葉仮名字母の使用に影響を与える表記環境」『日本語学研究与資料』三六号

西宮一民(一九六八)「日本紀寛宴和歌の左注と書紀の訓読」『文学史研究』一〇号初出

『日本上代の文章と表記』(風間書房 一九七〇) 所収

橋本四郎(一九五九)「訓仮名をめぐる」『萬葉』三三号初出

『橋本四郎論文集 国語字編』(角川書店 一九八六) 所収

毛利正守(二〇一〇)「万葉集における訓仮名と二合仮名の運用」『叙説』三七号

【付記】本稿は、早稲田大学日本語学会二〇一三年度前期研究発表会における発表に基づく。発表に際して多くの方より「意見・ご教示を賜った。ここに記して厚く御礼申し上げる。また、本稿は早稲田大学二〇一三年度特定課題研究助成費(課題番号 2013A-826)による研究成果である。

—さわぎき ふみ 大学院文学研究科博士後期課程—